

ゲドは誰と戦うのか？

—ル=グウィン著『影との戦い—ゲド戦記 1』と TV 映画『ゲド—戦いのはじまり』比較研究—

大坪 史奈

はじめに

アーシュラ・K. ル=グウィン (Ursula K. Le Guin) の『ゲド戦記』(Earthsea) シリーズの最初のもの『影との戦い』(A Wizard of Earthsea, 1968) は、『ゲド—戦いのはじまり』(Earthsea, 2004) として、ロバート・リーバーマン (Robert Lieberman) 監督により TV 映画化された。¹ このとき原作者のル=グウィンが、「主要キャラクターを白人俳優に演じさせ、自分の描いた作品世界を台無しにした」として痛烈に批判したことは、よく知られている (Le Guin, “A Whitewashed Earthsea”)

ル=グウィンはこのエッセイで、映画の主要キャラクターのうち、原作同様、褐色の肌の人物として登場するのは魔法使いのオジオンただ一人であったことへの批判と、自身の作品世界が台無しにされたことへの憤りの両方を述べている。しかし、このエッセイは短く、彼女の憤りの元となった要素すべてを説明しているわけではない。原作者の憤りを真に理解するには、どの主要キャラクターの肌の色が原作と映画版で違っているのか、原作者の描いた物語と映画のストーリーはどう異なり、結果として原作者の描こうとした世界とリーバーマンら映画製作陣の描こうとした世界とは、どう異なっていくのかを検討する必要がある。本論文では、ル=グウィンのエッセイでは言及されなかった人物を含め、原作と映画版の主要キャラクターについて比較検討することで、ル=グウィンの批判に込められた意図を読み解いていきたい。

比較分析に先立ち、2 作品の粗筋を紹介したい。原作『影との戦い』の主人公は「赤褐色 (red-brown) の肌」(44) をした少年で、7 歳で不思議な力に目覚める。12 歳のとき村に侵攻してきた大国カルガドの軍勢をその力により退けるが、力尽き、ひん死となる。すると、「茶褐色 (dark-copper brown) の肌」(25) をした魔法使いの男オジオンが村を訪れ、少年を魔法で回復させた上、彼の「真の名」(true name) はゲドだと教える (24)。この物語世界において、「真の名」を言い当てることは、相手の正体を把握することを意味する。ゲドの本質と才能を見極めたオジオンは、自らのもとで修業することを勧める。

ゲドはオジオンに弟子入りし、魔法使いの見習いとなるが、その後ローク島にある魔法使いの学院に入学する。ここで彼は、学友ジャスパーとのライバル関係に苦しむ。ある日「(死者の) 呼び出しの技」を競うことになると、ゲドは自分の優位を示そうとあせった挙句、「影」(the shadow) と呼ばれる謎の存在を呼び出してしまう (63)。この時、ゲドは大けがを負い、以降、「影」に追われる身となる。

やがて学業を終え、一人前の魔法使いとなったゲドは、ドラゴン退治の依頼を受け、ドラゴンの住む島へと赴く。帰路、彼は「影」に襲われて遭難するが、とある島に流れ着き、領主ベンデレスクと妻セレットに介抱される。

こうして「影」に追われる旅を続け、命を落としそうになったり、様々な人と出会いな

がら、勝気で激昂しやすかったゲドは考え深い青年へと成長し、やがて、オジオンの教えのとおり、「影」と向きあうことに挑戦する。そして最後に「影」の「真の名」もまたゲドであると分かって結末となる。

TV映画『戦いのはじまり』は、とある村で父親やガールフレンドなどと平和に暮らす青年ゲド—白人男優ショーン・アシュモア (Shawn Ashmore) 演じる—が、地下室にいる謎の女性の白昼夢を見るところから始まる。彼は原作同様、大国カルガドの侵攻を魔法で追い払うが、絶命する。黒人俳優ダニー・グローバー (Danny Glover) 演じるオジオンが村を訪れ、ゲドを蘇らせる。回復後、ロック島の学院に入学したゲドは、学友ジャスパーと「死者を呼び出す魔法」の勝負をする。ゲドは呼び出しに成功するが、自身の「影」をも呼び出してしまい、放校処分となる。放浪の旅に出た彼は、「影」に追われ、ドラゴンと出会い、最後にたどり着いた神殿の地下牢で、夢で見た女性に会う。女性は、テナーという名の巫女であった。

その頃カルガド国の王タイガスは、大巫女サーや巫女テナーらが守る神殿に愛人コシルを巫女として送り込み、神殿に隠された死霊「名無きもの」(the nameless ones)の秘密を探っていた。死霊の力を得て不死身となり、世界を制覇することを企んでいたのだ。タイガスは神殿に乗り込み、ゲドと対決する。ゲドは、自身の「影」を取り込むことに成功し、王は自滅する。ゲドは巫女たちを救い、テナーと結ばれてハッピーエンドとなる—以上がTV映画版の粗筋である。

本論ではまず、原作にも映画にも登場するキャラクター (オジオン、ジャスパー、ドラゴン) に注目する。続いて、原作のみに登場するキャラクター (セレット)、最後に映画にのみ登場するキャラクター (タイガスとテナー) について検討する。²

1. 原作・映画双方に登場するキャラクター:オジオン、ジャスパー、ドラゴン

ここでは、原作・映画版双方に登場する主要キャラクターのうち、役どころが大きく異なる者として、オジオン、ジャスパー、ドラゴンの三者に注目し、考察していく。

オジオン:原作と映画版で異なる「褐色の肌」の意味合い

原作では、魔法使いオジオンは常にゲドを導く存在として描かれる。ゲドが自分の能力に慢心したとき、彼は毅然とした態度で諫める。一方、ゲドが窮地に陥った際には助言を与え、進むべき方向を示すのである。

以下は、原作でオジオンがゲドに対して、ゲドを追跡する謎の存在、つまり自身の「影」に向き直るようにと助言する場面である。ここでは、ゲドは領主夫人セレットと共に追手から逃げようとするものの夫人は殺されてしまい、ハヤブサに姿を変えた彼だけが、命からがらオジオンのもとにたどり着いたのであった (このエピソードについては本論2項で詳説)。憔悴した様子のゲドに、オジオンは、“You must turn around. . . . If you go ahead, if you keep running, wherever you run you will meet danger and evil, for it drives you, it chooses the way you go. You must choose. You must seek what seeks you. You must hunt the hunter” (120) と諭す。つまり、自分が行く道を選べ、「影」に追われるのではなく、向き直って追う立場になれば、と彼は言うのである。

オジオンはその一方で、具体的にどう行動すべきかは教えない。彼の指示は抽象的で、「いちばん大切なことは師匠が教えてやったりできることではない。弟子は自分の体験を通じて学びとるより他ない」（河合、「ハール=グウィン」301）という姿勢を貫く。上記の場面ではまた、彼は賢人から引き継いだ特別な木材を用いて魔法の杖を切り出し、ゲドに渡す。魔法の杖を渡すことは、相手を一人前の魔法使いと認めたことを示しており、今後は杖の力を頼みに自分ひとりで戦い続けよ、というメッセージでもある。オジオンは、杖をどう使うのかは説明しないが、一人旅を続けるうちにゲドは直感的に杖の使い方を会得していく。そしていくつかの場面で、杖はゲドの命を守る重要な役割を担うことになる。

それでは、映画において、この場面はどのように描かれるであろうか。映画版のオジオンは、原作と同様ゲドを導く存在であるものの、その態度は叱咤したり諫めたり、ということではなく、常に優しく見守るという姿勢である。「影」から逃げることに疲れたゲドに助言をする場面は存在するが、映画では、疲れ切った彼に「精のつくウナギのスープ」をふるまいつつ、にこやかに、冗談を交えながら助言する（DVD 01:17:59 前後）。このとき、オジオンは木を削り杖を作っているが、魔法使いにとって重要な役割を担う杖、ということではなく、単にゲドに杖を与えるに過ぎない。その後ゲドはこの杖を使って魔法を使うことはないし、神殿を舞台に大活躍するシーンでは、杖をついていない。つまり、この杖は、歩くのもままならない状態のゲドのためにオジオンが作ってくれたものであり、映画のオジオンは、杖や暖かい寝床や食べものを与えてゲドを支える人、という役どころであることが分かる。また、オジオンが黒人俳優によって演じられ、ゲドが白人俳優によって演じられることにより、二人の間に父子の関係が感じられることはない。

このようなオジオンの姿と言動に、文学作品や映画に登場する黒人ステレオタイプの一つ、マジカル・ニグロの特徴が認められるとする説もある。³

原作では大多数の登場人物が褐色の肌を持つのに、映画版ではゲドはじめ主要キャラクターほとんどが白人キャストに変更されており、作者が激怒したのは先に紹介したとおりである。そうした中でオジオンだけが原作と同じ茶褐色の肌の人物として登場することは、一見、評価できることのように見える。しかし、原作では厳格で毅然とした指導者であったオジオンが、映画版では白人主人公の引き立て役になっていることを見逃してはならない。

映画のオジオンは原作と同じ肌色の人物ではあるものの、その意味するところは異なっている。原作者は、オジオンやゲドをはじめとする褐色の肌を持つキャラクターの活躍を描くことで、「主人公と言えば白人男性」という昔ながらの物語の在り方を脱し、多様性溢れる物語世界を描こうとしたのであった。一方、映画ではこうした原作者の意図は損なわれる結果となり、オジオンの役どころは、旧態依然とした白人を引き立てる黒人わき役に挿げ替えられているのである。そして、この違いが作品全体の雰囲気の違い—原作は褐色の肌を持つ主人公ゲドの成長物語である一方、映画版は白人ヒーローがオジオンというやさしい黒人の老人に支えられて活躍する冒険物語—to結び付いていく。

ジャスパー：ゲドの劣等感の投影(原作)は、単なる「姑息な裏切り者」(映画)に

ジャスパーは、原作でも映画版でも、貴族の出という設定である。どちらの作品でもジャスパーの言動はゲドの反発を買い、遂にはゲドを「影」を呼び出すという危険な行為へ

と導いていく。

原作のジャスパーは学院の上級生として登場し、ゲドに対して、貴族が使う丁寧な言葉で話しかける。ゲドは山村出身ということもあり、その言葉遣いに違和感を覚え、馬鹿にされたと感じる。ジャスパーは優秀な学生でもある。当初、自分を優秀と思っていたゲドは自信を無くし、多くの学生の中で飛びぬけて上品で優秀なジャスパーを敵視するようになる。

当のジャスパーはゲドを格下の存在と考えていて、“I want the company of my equals” (60)とゲドに語り、挑発する。この言葉をきっかけに、二人は学院の規則で禁じられている魔法を使っての果し合いをすることになる。ジャスパーが「死者の霊を呼び出す」技での勝負を提案すると、再びゲドは挑発に乗ってしまい、うかつにもこの魔法を使ってひん死の重傷を負う。傷が癒えて学院に戻ったとき、すでにジャスパーは学業を終えて魔法使いとして独り立ちし、学院からいなくなっていた。

こうして、最終的にジャスパーは、ゲドにとって苦い思い出の人物となるのであるが、彼はゲドに一つの気づきを与えて去っていくとも言える。すなわち、嫉妬に駆られて自分の器を顧みず勝負に出ることは危険で、ときに大きな代償を払うことになるという真実を、ジャスパーとの出会いを介してゲドは学んだのである。ジャスパーは、激高しやすく嫉妬深いというゲドの心の弱さを映し出す鏡のような存在として描かれていると解釈することができる。

一方、映画版のジャスパーは、ゲドと同年代の青年として登場する。そして、大勢の前で自分の能力をひけらかしたり、学友の手に魔法のナイフを突き刺すふりをして笑いを取るなど、優れた魔法使いというより、性格の悪いいたずらっ子的な側面が強調される。ゲドは、こうしたジャスパーの様子を見て軽蔑はするが、嫉妬を感じる様子はない。彼はゲドの未熟さの体現あるいは劣等感を投影した人物として描かれているわけではないのだ。

ジャスパーが、いつのまにか学院の教えに背いて、姑息な裏切り者へと身を落としたことが分かるのは、タイガス王率いるカルガド軍がロック島の学院へ攻め入る場面である。ジャスパーは、王の軍勢を学院内部へ導く見返りに大賢人にしてくれ、と王に要求するのである。

この企みを知った学院の長、大賢人ネマールは、“We have given you power to bring light and goodness to the world. And instead you have chosen darkness and evil. You break my heart” (DVD 01:23:40-01:23:51) と言って、ジャスパーを叱責する。ここで、“power to bring light and goodness” を授けたはずのジャスパーが “darkness and evil” を選んでしまった、と言っているところに、ネマールの失望の深さが感じられる。正から邪へとジャスパーが墮落したことがはっきり示される場面である。

結局、映画のジャスパーは、魔法の力をすべて失って学院から追い出されてしまう。ゲドを嘲笑し、邪悪な王タイガスと結託して学院を転覆させようと目論んだ卑劣さへの因果応報と解釈することができる。原作では、そつがなく、ゲドの未熟さを映し出す役どころだったジャスパーは、映画では、愚かで、悪の手先に成り下がる小悪党として描かれていると言える。つまり、映画のジャスパーはゲドと直接対決はせず、ゲドにとって「敵ではない」小物の扱いではあるが、ゲドと敵対する勢力の一味ではあり、外敵として描かれていると言えよう。

ドラゴン:ゲドを試す知恵者(原作)は、単なる「悪の手先」(映画)に

ドラゴン(竜)は架空の存在で、フィクションには悪役として登場することが多い。ドラゴンが登場する物語の典型は、ヒーローが凶悪なドラゴンを退治して囚われの姫を救出し二人が結ばれるというものである。ドラゴンを倒すことは一人前の男になった証である。しかしながら、ル=グウィンが原作で描いたドラゴンと主人公の関係性は、こうした伝統的なものとは大いに異なる。

一人前の魔法使いになったゲドは、人々の依頼で凶悪とされるドラゴンを退治しに行くのであるが、実際に会ってみると話し合いによる解決が可能な相手と気づく。⁴ ゲドは、ドラゴンの「真の名」はイエボーであると言い当て、相手の正体を見破ることにより優位に立った。やり取りの末ドラゴンは屈服し、二度と人間たちの住む領域を襲わないと約束して、対決は終わる。

ドラゴンもまた、人間に対する理解を新たにする。ドラゴンはゲドを試そうと、“You may choose nine stones from my hoard”(89) と言う。つまり、自分の持つ宝を与え物欲を満たしてやろう、と誘惑するのである。ゲドがその提案を拒むと、ドラゴンは“Where is men’s greed gone?”(90) と不思議がる。ドラゴンの方も、人はすべて自己中心的で誘惑に弱いという思い込みがあり、ゲドは宝と引き換えにドラゴン退治をやめるに違いないと思っていたのだ。続いてドラゴンは、ゲドを追いかける「影」の存在を看取すると、「影」の「真の名」を教えてゲドの立場を有利にしてやろうかと持ちかける。しかしゲドは不要だと言って、策に嵌まることはなかった。つまり、この場面においてゲドは、見た目はドラゴンと戦っているのだが、本当に戦っている相手は、誘惑に負けそうになる自分の弱さと解釈することができる。

このように原作では、伝統的な物語のドラゴンの性質(人間と異質で、敵対的)を否定すると同時に、ドラゴンが考える人間の性質(自己中心的で誘惑に弱い)をも否定する様子が描かれる。このドラゴンは人間と同じくらい知恵深い存在であり、知恵を駆使して未知の者と対決することの意義深さをゲドに教えてくれたと解釈することもできる。ドラゴンもまた、ゲドにより人間に対する偏見から解き放たれるので、結果として、この対決は両者にとって実り多いものとなった。

見方を変えると、ル=グウィンは、ドラゴンを通じて、周りが「敵」と決めつけている存在も、実際に対峙してみるとそうではないことがあり、一対一の真剣勝負は人間に気づきを与え成長させることがある、と教えているのではないだろうか。

それでは、映画版のドラゴンは、どのように描かれているのであろうか。ドラゴンは、ゲドが神殿に忍び込む前の場面(DVD 01:55:10 前後)で、ゲドの「影」であるゲベスの差し金で現れる。その性格は狡猾かつ残忍であり、両者が話し合って理解しあう兆しはない。

ドラゴンは、原作同様ゲドに願いを叶えてやろうと持ちかける。すると、映画のゲドは誘惑に負けてゲベスの「真の名」と居場所を尋ねてしまう。そして、結局のところゲドはまんまとドラゴンの策に嵌まってしまい、ゲベスの「真の名」を聞き出せずに終わる。

映画のドラゴンは、このようにゲドを惑わせた挙句に姿を消してしまい、振り返ってみると特に大きな意味を持つ存在とは思われない。単純に、奇怪な姿で登場して主人公に戦いを挑み、謎をかけることで冒険物語を盛り上げ、物語の中だるみを防ぐ役どころとすら解釈できる。ただし、映画の最後でゲドは、囚われの巫女テナーを救出してハッピーエン

ドを迎えるので、大きく見れば、映画のドラゴンは伝統的な筋立て—主人公はドラゴンとの戦いを経て姫と結ばれる—の中に納まっていると解釈することもできる。

2. 原作のみに登場するキャラクター：映画では不要となる誘惑者セレット

前項では原作と映画版の両方に登場するキャラクターで、際立った違いが認められるものについて論じた。原作では、主人公の内面に深く関わり、新たな気づきと知恵を与え成長を促す役割を持っていたキャラクターが、映画版では、ステレオタイプの人物(オジオン)や、単なる外敵(ジャスパーとドラゴン)として、主人公を引き立て、話を彩り豊かに盛り上げる役どころとなっていることが分かった。

一方、原作において重要な役割を持ち、ゲドの人物構築に深く関わりつつ、映画には登場しないキャラクターも存在する。本項では、原作のみに登場する人物セレットを例にあげ、論じたい。

ゲドは13歳のとき、学院を訪ねてきた卒業生ベンデレスクとその妻セレットと出会う。ベンデレスクはかつて優秀な魔法使いであったが、現在は老いて、とある島の領主となり、特別な力を持つ石を家宝のように何代も引き継いでいるという人物である。

夫妻の前でジャスパーが魔法を披露すると、セレットは素晴らしいと褒め、魔法使いとして二人のもとで働くことを持ちかける。一方ゲドは、ジャスパーの披露した魔法と夫人の誘いに対する断り方を見て、自分ならもっとうまくやれたはずと思う。その心情は“bitter envy” (54) であった。先輩のジャスパーが女性に一人前の魔法使いと認められたことを、ゲドは嫉妬したのである。この時味わった嫉妬を含め、ジャスパーに負けたくないという気負いが積もり積もって、先に述べた「呼び出しの魔法」対決をして大失敗を犯すことにつながるのである。

ゲドは、18歳で一人前の魔法使いとなったとき、夫妻と再会する。謎の「影」に追跡され海で遭難した彼は、ベンデレスク領主の治める島に流れ着き、夫妻の住む館で介抱されるのである。

当初、田舎育ちのゲドにとって領主夫妻の豪華な館は居心地が悪く、自分は場違いな存在であると感じられた。“... he was not himself, not the self he had been” (105). しかし、“With her he began to forget his stiffness and his shame” (108) と描写されるように、彼は夫人と二人きりで過ごしていると、こわばりが解け頼もしい若者になった気がするのであった。

一方、夫ベンデレスクは妻の3倍年を取っていて、妻を大切な人物として扱う様子はない。ゲドは夫人を“an item of Benderesk’s hoard” (108) と思い、介抱してくれたお礼に、彼女を慰めようとする。ゲドはこれまで女性に対して何か自発的にしようと思ったことはない。セレットは初めての恋愛対象だったと推測される。

話が急展開するのは、セレットがゲドを追う謎の「影」に言及したときである。彼女は、「影」の正体、つまり「真の名」を、夫が所有する不思議な石に聞いてみることを持ちかけるのだ。彼女も夫も、その石の力を引き出す実力がないが、ゲドほどの魔法使いならできるはずだと言う。石の力を引き出すことはすべてを支配する力を得ることだとも言い、その力で彼女を島から救い出してほしいと仄めかすのであった。

「真の名」を知り、相手の正体を掌握することができるなら、願ってもないことである。ゲドは一瞬、石の力を借りて自分を追い詰める「影」の正体を暴く誘惑に駆られる。しかし、彼は直感的に、他者の力を借りて「真の名」を知ろうとするのは危険な罠に嵌まることであり、その誘惑に打ち勝つことこそ肝心だと思う。そこで彼は夫人の申し出を断るのだが、そのときの心情は、ドラゴンが「影」の「真の名」を教えてやろうかと誘惑したときと同じであった。

結局セレットは、ドラゴンと同様、ゲドをそそのかそうとして失敗する。一方、ゲドはここで再び、誘惑に打ち勝つことを学ぶのである。かつてはセレットに誘われるジャスパーに嫉妬を覚え、積もり積もった嫉妬が原因で、ついに「影」を呼び出すという失敗を犯してしまった彼であるが、ここで同じ失敗をすることはなかった。ゲドの成長ぶりが感じ取れる場面である。

やがて、バンデレスクは、石を私利私欲のために使おうとしたセレットを裏切り者とのしり、追跡者を放つ。ゲドはハヤブサに、セレットはカモメに変身して島を飛び立つが、カモメは追跡者に殺され、ハヤブサのみ逃げおおせ、半死半生でオジオンのもとにたどり着く。そしてオジオンが介抱し、杖を与えて送り出す場面へと続くのである。

以上が、ゲドと領主夫妻の二度目の出会いと結末である。では、この出来事は何を意味するのであろうか。この後ゲドは意気消沈し、自分の限界を知ることになる。つまり、男性として、不幸な女性を救い出したい、という願望を初めて抱くものの、まだその実力は備わっていないという厳しい現実を突きつけられたのだ。

しかし、ゲドはこの後オジオンに諭され、自分の弱さという内なる敵に向き直るきっかけを得るので、セレットとの出会いと苦い別れは、彼が成長するプロセスの一環であったと言える。また、ドラゴンの誘惑と同様、自ら「影」と対峙するのではなく、他者の力を借りてその正体を極めようとするのは危険である、ということを経験したとも言える。

セレットは、映画版には登場しない。映画ではゲドは最初から大人として描かれていて、物語の冒頭ではガールフレンドと戯れる場面があり、いかにも恋愛に慣れた普通の青年であることが見て取れる(DVD 00:02:22 前後)。つまり、映画版はゲドの少年期から青年期にかけての成長物語ではなく、青年ゲドが外敵と戦って勝利を収め、テナーという女性を救い出して結ばれるまでを描く冒険物語である。そのような流れの中では、主人公に未熟さを思い知らせ、成長を促すセレットのようなキャラクターは必要がなく、セレットたちのエピソードは省かれたのではないかと考えられる。

3. 映画のみに登場するキャラクター：タイガスとテナー

前項では、原作には重要な意味を持つ人物として登場するのに、映画版には登場しない人物、セレットについて論じた。

一方、映画では大きな意味を持ちながらも、原作には登場しなかったり、全く異なるキャラクターとして登場する者もいる。本項では、このような人物として、国王タイガスと巫女テナーを取り上げ、論じる。

タイガス:映画版で必要となったゲドの「究極の敵」

タイガスは、「名無きもの」と呼ばれる死霊の力を借りて不死身となり、最終的には世界を支配したい、という野望を抱く男である。彼が治めるカルガド国について、映画冒頭のアナレーションでは、“Evil in the form of Kargad invaders questing to rule the world spread across Earthsea like a plague”(DVD 00:36-00:46) と説明しており、カルガド国とタイガス王はともに、徹底的に邪悪な存在として描かれていく。

王は諸国を侵略し、ゲドを含む多様な民族の人々が暮らす多島海領域アースシーを支配下に置こうとする。その一方、“... a magus will arise, who will reunite the Amulet of Peace and will end all war on Earthsea”(DVD 05:28-05:34) という予言を恐れ、カルガド軍を魔法の霧で追い払ったという魔法使いゲドを探し出して滅ぼそうとする。王はまた、巫女コシル(実は彼の愛人)を利用して、墓所の秘密を知る大巫女サーを毒殺し、ジャスパーの協力を得て学院の大賢人の殺害を試みる等、一貫して邪悪な行動を続ける。

原作では明確に悪を象徴するようなキャラクターは存在しない。ゲドは、最も恐れていた敵すなわち「影」との戦いに臨むうちに、敵の正体は自分自身であることを掌握して物語は終わるのであるが、映画版ではタイガスこそゲドが倒すべき究極の敵であり、タイガス対ゲドの攻防戦が映画の見どころとなる。最終決戦の際には、彼は圧倒的な力でゲドを苦しめる一方、ゲドは「影」と一体化し、その力を得てタイガスと対峙する。最終的に、タイガスは「名無きもの」に襲われて自滅し、ゲドが勝利してハッピーエンドとなる。

テナー:映画版で必要となったゲドの相手役

テナーは、原作シリーズの第2作『こわれた腕環』の主人公で、アチュアン神殿の大巫女としてゲドと出会う。さらに、第4作『帰還』においては、ゲドと事実上の婚姻関係に至る人物である。

映画版のテナーは、ゲドの白昼夢に謎の美女として登場する。映画後半までゲドと直接会うことはない。しかし神殿の地下牢でついに出会うと、二人の距離は急速に縮まる。この、二人が出会うシーンで物語は大きく盛り上がるのである。

以下の引用は二人が対面した時に、ゲドが、自分はゲベス(つまり「影」)に取り憑かれていないと信じてほしいと、テナーに訴えるシーンである(DVD 02:29:46-02:30:49)。

Ged: I've had visions of you for as long as I can remember. It's the same with you, isn't it?

Tenar: Yes. But how do I know if you're the wizard or the Gebbeth inside the wizard's body?

Ged: Look into my eyes.

Tenar: So you can devour me?

Ged: I won't devour you. Just look into my eyes and see my soul. You know we've been brought together! You have faith in that, let it give you faith in me! I've dreamed of this.

ここでは、ゲドがゲベスに取り憑かれていることを恐れるテナーに対し、ゲドは目を合わせ、瞳を覗き込ませることで信頼を得ようとする。

こうして物語の終わりにゲドは世界を救い、二人は結ばれ、ハッピーエンドとなるのは、先に述べた通りである（DVD 02:51:04 前後）。

以上、本項では映画版のみに登場するキャラクターについて論じてきた。まとめると、タイガスは、ゲドにとって明らかな外敵であり、絶対的な悪である。一方、テナーは、巫女というよりゲドが心を寄せる相手役女性としての立場が強調されていると言える。結果として、この二人の登場により、映画版は、ヒーロー冒険物語—邪悪な敵との戦いに正義の主人公が勝ってヒロインを救出して結ばれる—として盛り上がるのだと言える。

おわりに

本論では、ル=グウィンの原作と、これをもとに作られた TV 映画について比較考察してきた。ここで改めて、原作と映画版とで主なキャラクターはどう異なるのか、また、そうしたキャラクターたちによって作り出された作品世界は、どう違ってきたのか、整理していきたい。

原作と映画で大きく人物像が異なるのは、オジオン、ジャスパー、ドラゴンであった。オジオンは、原作ではゲドを毅然とした態度で導く父親のような存在である。具体的な行動をゲドに教えることはしないが、セレットを助けることができず塞ぎ込んだゲドに、己自身と向き合うよう諭して心の成長を促した人物である。オジオンもゲドも褐色の肌の人物と設定されたことにより、二人には父が息子を諭し導くというイメージがある。

原作のジャスパーとドラゴンは、ゲドの弱点を浮かび上がらせる役割を担っている。学院に来る前は自分の技量に自信を持っていたゲドは、入学した途端、上品でそつがない上、ゲドに対して挑発的な上級生ジャスパーを過剰に意識するようになり、彼に対する敵愾心ゆえに致命的な失敗を犯す。しかし、この失敗のおかげで成長したゲドは、激高しやすいという弱点を克服し、ドラゴンとの戦いを冷静さをもって制する。ドラゴンは自らの宝を差し出し、ゲドを誘惑しようとしたが、ゲドはその誘惑と挑発にひそむ危険を冷静に察知し、乗り越えることができた。

原作において主人公ゲド、ひいては読者に新たな気づきを示唆する役割を持っていたこれらのキャラクターは、映画版ではオジオンのようにステレオタイプの人物になったり、ジャスパーのようにつまらない敵役になったり、ドラゴンのように単に恐ろしい怪物に置き換えられたとまとめることができる。

映画のオジオンはゲドの究極の味方であり、白人ヒーローに協力するわき役黒人として登場する。原作では、ゲドの師匠であり父親的存在に感じられたオジオンが映画では黒人召使または爺やのような存在に感じられるのは、ひとえに、黒人のオジオンが白人のゲドに尽くすからである。また、原作のジャスパーがゲド自身の自信のなさ、嫉妬心の投影と感じられるのに対し、映画のジャスパーがそうではないのは、単に高慢な学友で、滅ぼすべき敵の一味として描かれるからである。原作のドラゴンは、ゲドを誘惑し、最後にはドラゴンと人間とは共通点があり、互いを理解しあえる存在、という気づきを与えてくれるが、映画のドラゴンは、こうした深みのある言動がなく、単にヒーローの行く手に立ちふさがり強力的な怪物として描かれていると言える。

原作のみに登場するセレットは、ゲドが誘惑との戦い、つまり自分の弱さとの戦いに勝

ち、少年から青年へと精神的に成長するきっかけを与えた人物として描かれている。ゲドは彼女を救うことに失敗したことで、女性を救って一人前の英雄となろうとするのは危険であり、結局、一人前になるには自分と向き合うしかないのだ、と気づいたのであった。

つまり、原作は、自分の心の弱さに翻弄され、「影」を呼び出すという危険行為に陥る幼い時代から、ドラゴンの誘惑と挑発に打ち勝つ段階を経て、セレットの死により苦い教訓を得て大人へと成熟していき、ついに「影」こそ自分、と把握するに至るゲドの内面の戦いと成長の軌跡をたどっているのである。

映画版と原作との違いは、映画版にのみに登場する人物を振り返るとよく分かる。国王タイガスは絶対的な悪であり、ゲドにとっては究極の敵である。この外敵に打ち勝つことでゲドという存在が正義であることが証明され、ヒロインであるテナーを救出して一人前の男性となるというのが、映画のストーリーの骨であり、肝である。映画版は、勧善懲悪の物語であり、外敵と戦って自分の行く道を切り開くヒーローの活躍を描いていると言えるが、原作はそのような「完全なる善」や「絶対的な悪」や「救出を待つヒロイン」という要素がない世界であるため、宿敵タイガスと、相手役のテナーを創出する必要があったのである。

映画版でも、外敵を小悪党ジャスパーから怪物ドラゴン、そして最強の敵タイガスへと順に配し、ゲドが弱いものから強いものへと順番に出会い、最終的に勝利をおさめる話になっているとも言えるが、原作と違っているのは、ゲドが一つ一つの出会いを経て成長するということがない点である。

原作者のル＝グウィンが読者に、自分の中にこそ最大の敵が潜んでおり、それが「影」というものの正体である、自分自身と向き合って「影」の正体を把握することが成長なのだ、というメッセージを伝えたかったのだと考察される。また、ゲドやオジオンなど主要キャラクターを褐色の肌の人物に設定することで、白人男性だけが主人公ではない、多様な人種が活躍する物語世界を描きたかったのであった。

これに対し、映画版は、主人公ゲドを白人男優に演じさせ、オジオンという指導者をゲドを支える黒人の爺やのような役どころに換えた。それによって、ゲドの成長物語ではなく、ゲドが悪の象徴のような敵と戦い、美しいヒロインを救いだす、という伝統的な英雄譚として、視聴者一般に受け入れられやすい、旧態依然とした娯楽作品を作り上げたと言える。そしてその結果、原作者の描いた作品世界を台無しにしたのである。

自身が描いたファンタジーの世界が、通俗的な娯楽映画となってしまったことをル＝グウィンは嘆いたのであるが、それはキャラクターの肌色ひとつの変更だけではなかった。そこに始まった変更が、いかに物語世界全体を変えていくのか、それが明確に見えてくるのが映画というジャンルかもしれない。

【付記】

本論は、富山大学人文科学研究科授業科目「アメリカ言語文化特論(1)」(担当教授：赤尾千波、2018年度前期)の課題論文に加筆・修正したものである。

注

1. TV映画は、アメリカにおいてミニシリーズとしてサイファイ・チャンネルから放映され、その後一本の映画としてDVD化された。映画には、少女テナーの成長を描く原作『ゲド戦記』シリーズ第2作『こわれた腕環』(*The Tombs of Atuan*, 1971)の人物も登場する。しかし、登場する文脈・内容ともにまったく異なり、またゲドの戦いや成長は描かれない。そこで本編では、第1作を映画のもとになった作品とし、考察していく。本論では、このTV映画のことを、映画版または『戦いのはじまり』と表記する。ル=グウィン原作小説は、原作または『影との戦い』(清水真砂子の訳書タイトル)と表記する。
2. テナーは、『ゲド戦記』シリーズの『こわれた腕環』、『帰還』(*Tehanu*, 1990)、および『アースシーの風』(*The Other Wind*, 2001)に登場するが、映画とは異なるキャラクターとして別の文脈で登場するため、本論では映画にのみ登場する人物に分類した。
3. 赤尾は、マジカル・ニグロを「超自然的な力を発揮して、みずからを投げうって白人主人公を助ける黒人わき役」と定義している(16)。
4. 『アースシーの風』の第3章には、カレシンという名のドラゴンが登場して、ドラゴンと人間はかつて「一つの存在」(one people)であったと言う場面がある(152)。

文献一覧

Legend of Earthsea. Directed by Robert Lieberman, performance by Shawn Ashmore and Danny Glover, Sci-Fi Channel, 2004.

Le Guin, Ursula K. "Frankenstein's Earthsea." *Locus: the Magazine of the Science Fiction & Fantasy Field*, 2012. locusmag.com/2005/Issues/01LeGuin.html. Accessed 23 Oct. 2018.

---. *The Other Wind*., Kindle ed., The Orion Publishing, 2015.

---. *Tehanu. The Earthsea Quartet*, Penguin Books, 1992.

---. *A Tomb of Atuan. The Earthsea Quartet*, Penguin Books, 1992.

---. "A Whitewashed Earthsea: How the Sci Fi Channel Wrecked My Books." *Slate Magazine*, 2004.

www.slate.com/articles/arts/culturebox/2004/12/a_whitewashed_earthsea.html.
Accessed 23 Oct. 2018.

---. *A Wizard of Earthsea. The Earthsea Quartet*, Penguin Books, 1992.

赤尾千波著『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ 『国民の創生』から『アバター』まで』、富山大学出版会、2015年。

河合隼雄著「ファンタジーと言葉」、『ユリイカ 8月臨時増刊号』第38巻第9号、2006年、55-59頁。

---. 「八 ル=グウィン『影との戦い—ゲド戦記Ⅰ』」、『河合隼雄著作集第4巻 児童文学の世界』岩波書店、1998年、297-312頁。

---. 「九 ル=グウィン『こわれた腕環—ゲド戦記Ⅱ』」、『河合隼雄著作集第4巻 児童文学の世界』岩波書店、1998年、313-328頁。

DVD『ゲド—戦いのはじまり』日活株式会社、Janコード4988103631214。

ル=グウィン、アーシュラ・K.著『アースシーの風—ゲド戦記6』清水真砂子訳、岩波書店、2009年。

---. 『影との戦い—ゲド戦記1』清水真砂子訳、岩波書店、2009年。

---. 『帰還—ゲド戦記4』清水真砂子訳、岩波書店、2009年。

---. 『こわれた腕環—ゲド戦記2』清水真砂子訳、岩波書店、2009年。

---. 『夜の言葉—ファンタジー・SF論』山田和子訳、岩波書店、2006年。